# 2016年度入学試験問題

# 国　　語

（試験時間　13：35～15：05　90分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

イギリスの哲学者ジョン・スチュアート・ミル（一八〇六―一八七三）は、個人の利益は当人自身が一番よく配慮することができると考えていた。そのため、公衆衛生活動も、権力によって強制するパターナリズムではなく、他者への危害の防止という根拠に基づいて行なうべきだと考えていた。

ミルは公衆衛生についてまとまった論文や著書を書いてはいないが、公衆衛生活動が個人の生活に立ち入ることのできる限界について明確な線を引いている。彼は次のように述べる。「公衆衛生に関する法の本来の目的は、人々が自らの健康に留意するように強制することではなく、人々が他者の健康に危害を加えるのを防止することである。もし彼らが自分の健康のためだけに行なうべきことを法によって命じるならば、当然、大半の人々はそれを圧政そのものと見なすであろう」。つまり、公衆衛生活動の目的は、当人の健康のためではなく、他人に危害を与えないためだというのだ。

ミルは具体例として、酔っぱらいの扱いについて考察している。ミルによれば、かつて酔っぱらって他人に危害を加えたことがある人に対しては、酔っぱらうことに関して規制を加えたり、処罰したりすることが正当化される。また、酒場では犯罪行為が起きやすいため、公共の秩序を守るための酒類の販売のライセンス化も正当化される。

ところが、「これ以上のいかなる制限も、原則として、私は正当だとは思わない」とミルは述べる。立派な大人を「彼ら自身のために強制する」ことは認められないと言うのだ。

しかし、実は、ミルの立場だとあまりに個人の自由を尊重しすぎており、現在の公衆衛生活動の多くを正当化することができなくなる可能性がある。そのため、公共政策としての功利主義は、ミルの立場を何らかの形で「乗り越える」必要があると思われる。

イギリスやアメリカでは、二〇〇〇年前後から(1)公衆衛生の倫理的側面に注目が集まっている。その理由として、次の二点が挙げられる。

一つは、感染症に対する関心の復活だ。「感染症に関する本は閉じるときが来た」。一九六七年に米国公衆衛生局長官がこう述べたとされる。この発言に象徴されるように、以前は死病として恐れられた結核をはじめとする感染症は、第二次世界大戦後にワクチンや治療薬の開発と普及が進んだことにより、少なくとも先進国においては最も恐るべきシッペイ(2)ではなくなったはずだった。

しかしその後、ＨＩＶ／ＡＩＤＳの流行や、ＳＡＲＳや新型インフルエンザなどの新たな感染症が出現してきた。また、温暖化の影響で感染地域が拡大したマラリアや従来の治療薬が効かなくなった多剤耐性結核など、旧来の感染症の脅威も高まってきた。

感染症の場合、他人への感染を防ぐために強制入院や隔離措置を行なったり、接触者の追跡調査をしたり、また場合によっては特定集団へのワクチン接種を義務化したりと、集団防衛のために、さまざまな形で個人の自由を制限する必要が生じる。そこで、個人の自由が最大限尊重される自由主義社会において、このような制限がどこまで正当化されるのかという問いが重要になってきたのだ。

第二に、医学研究の進歩による考え方の変化が指摘できる。かつては脳卒中、がん、心臓病は「三大成人病」と呼ばれていた。これらの病気に「成人病」という名前が付いていたのは、成人して年を取ったら誰でも自然になる病気と考えられていたからだ。つまり、病気の原因はカレイ(3)であり、年を取るのは仕方がないことなので、健診・検診などによってなるべく早く病気を見つけて治療を開始しましょう、という「早期発見・早期治療」が主な対策だったのだ。

ところが、その後の医学研究の進展により、こうした病気は食生活や睡眠・運動習慣といった生活習慣（ライフスタイル）にも大きく関係することがわかると、成人病に代わって「生活習慣病」という呼び方が用いられるようになり、病気にならないための健康増進活動が重視されるようになった。すると、人々には従来のように健診・検診を受けることだけでなく、喫煙や飲酒のような生活習慣を改善することも求められるようになる。つまり、(4)。

このように、感染症対策と健康増進活動の進展に伴い、以前にも増して公衆衛生活動が個人の自由と衝突する可能性がでてき

た。公衆衛生を理由に個人の自由を制限することはどの程度までならキョヨウされるのか。この問いについて規範的な検討が必要だということから、公衆衛生の倫理学という領域が生まれてきた。この分野は、病院における医師と患者の関係を前提とする「医療倫理」とは別の領域として認知されつつある。(5)

公衆衛生の倫理学の重要な問いは、個人の自由を尊重する社会において、公衆衛生（みんなの健康）を守るために個人の生活に介入することは、どの程度まで許されるか、というものだ。

ミルの他者危害原則に従えば、この問いに対する答えは、他人に危害を加えない限り、健康に関わる個人の行動は自由だというものだろう。だが、そうすると、現在行なわれている多くの公衆衛生活動は実施できなくなる。

たとえば麻薬などの薬物規制は、今日の公衆衛生活動の一つであり、所有や使用が禁止されているものも多い。しかし、ミルの立場だと、麻薬を使用している人が他者に危害を加えない限りは、その人に注意したり説得したり試みることはできるものの、薬物使用を禁止したり罰したりすることはできないことになる。

このように、一見したところ魅力的なミルの立場は、公衆衛生という政府の重要な仕事に関しては、大きな足枷（あしかせ）になりうる。このミルの立場をどう乗り越えるか（あるいは乗り越えずに公衆衛生活動を大幅に制限するか）が、当面のところ公衆衛生の倫理学の最大の課題となっている。

近年注目を集めている政治哲学的な立場に、リバタリアン・パターナリズムがある。これは、政府は人々が自らの最善の利益を追求できるように配慮するが、あくまで強制はせず、各人が異なる選択肢を選べる自由を保障するというものだ。セーラーとサンスティーンがこの立場を「ナッジ」と呼んで有名になった。ナッジとは「肘（ひじ）でつっつく」とか「[(6)]を押す」という意味だ。パターナリズムは本人の意思に反して何かを強制的にやらせるというイメージが強いが、ナッジはある行為を強制するのではなくそれを選ぶように誘導するというイメージだ。

リバタリアン・パターナリズムは一見してミルの自由主義の立場に近いが、ミルにはあまり見られなかった興味深い視点があるので、それを紹介しよう。(7)

リバタリアン・パターナリズムは、「人間はあまり合理的に行動しない」という仮定から出発している。たしかにこれはわれわれの実感に合っている。経済学者が前提とする古典的な人間像は、「どうすれば自分の幸福を最大化できるか」ということをいつも考えながら思慮深く行動している人である。しかし、現実にはこんな人はあまりいないだろう。多くの場合、われわれは冷静に考えれば選ばないであろう行動をその場の勢いでつい選んでしまうものだ。

とりわけこの傾向が(8)ケンチョだとされるのは、健康行動である。たとえば、やせたいと思っているにもかかわらず、コンビニのレジの前にチョコレートが置いてあればついそれを買ってしまう。また、体調が悪くて今日は飲酒はやめておこうと思っていても、夜の飲み会で「ビールの人、手を挙げて」と言われると問りの人につられてつい手を挙げてしまう。そしてこうした行動は、ほとんど意識されないままになされるのだ。

われわれが健康行動においてこのように不合理な行動をしてしまうのはなぜだろうか。一つには、われわれはしばしば現在の快苦を過大評価する傾向にあるためだろう。たとえば、食べ過ぎたり飲み過ぎたりすると、将来、肥満や痛風に悩まされる可能性があるとわかっていても、健康に関する行動の(9)キケツの多くは年単位の間を置いて現れるため、その苦痛は軽く見積もられてしまう。現在の快苦を過大評価し、将来の快苦を過小評価するこのような傾向は、心理学では現在バイアスと呼ばれる。

また一つには、広告会社や小売店がわれわれの(10)［　　］ではなく(11)［　　］に働きかける宣伝を行ない、われわれはあまり考えることなしにそれに影響を受けた飲食習慣を形成しているからだろう。筆者が好きな例は、以前あった某清涼飲料水のNo Reasonというコマーシャルだ。おそらくあの宣伝のメッセージは、何を飲むかについて自販機の前で考える必要はなく、とにかくこれを飲んでいるとかっこいいからこれを飲め、というものだろう。こうしたコマーシャルや広告によって、われわれが何を食べ何を飲むかは、「健康によいかどうか」という基準ではなく、「好きか嫌いか」という基準によって決められる傾向が強まるのだ。

二十世紀後半に活躍した法哲学者のH・L・A・ハート（一九〇七―一九九二）は、ミルの合理的な人間像に反して、われわれの多くは欲求が不安定で外的な影響に左右されやすい存在であり、しばしば不合理に行為すると述べた。そうだとすれば、

ある程度まではパターナリスティックな規制をして、望ましくない選択肢を選べないようにした方が、結果的に人々は合理的に行為できるだろう、というのがハートの考えである。

一方、[12]リバタリアン・パターナリズムでは、人々がより健康的な選択肢を意識的に選ぼうとしなくてもそうできるように環境の方を変更しようとする。たとえば、コンビニのレジの前にはチョコレートの代わりにバナナを置いておくとか、生ビールはジョッキではなくグラスやお猪口で出すのを普通にするなどだ。ただし、個人の自由を保障するために、不健康な選択肢も選択できるように残しておく。この点がリバタリアン・パターナリズムと通常のパターナリズムの違うところだ。

では、功利主義者が健康行動におけるこうした不合理性を考慮に入れるとどうなるだろうか。「不合理に行為しがちな人間」という人間像を仮定するなら、功利主義はリバタリアン・パターナリズムの考えの多くを、ほとんどそのまま受け入れることができるだろう。ただし、リバタリアン・パターナリズムは、ミルと同様、法によるパターナリズムをよしとしないので、公衆衛生活動は大変やりにくくなるだろう。

一方で功利主義は、ハートの言うようにある程度まではパターナリズムを受け入れることもできるだろう。ただし、ある程度のパターナリズムが望ましいと言っても、十九世紀のイギリスで行われていたような権威主義的な公衆衛生に戻るのは行き過ぎである。真理はその中間にありそうだ。

（児玉聡『功利主義入門』による）

注　パターナリズム……本人の意向にかかわりなく、本人の利益のために代理で意思決定したり行為したりすること。父権主義。　功利主義……社会の幸福と個人の幸福との調和を企図する倫理・政治学説。　セーラー……リチャード・セーラー（一九四五～）。アメリカの経済学者。　サンスティーン……キャス・サンスティーン（一九五四～）。アメリカの法学者。　リバタリアン・パターナリズム……自由主義的な父権主義。

〔問一〕 傍線(2)(3)(5)(8)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)「公衆衛生の倫理的側面に注目が集まっている」とあるが、その理由を感染症との関連で述べたものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 新たな感染症の出現に伴い、接触者の追跡調査やワクチン接種の義務化などに関して、財政的支援の正当性が問われるようになってきたから。

B 終息したかに思われていた感染症が近年、新たな形で出現するようになり、公衆衛生について医学的に検討する必要が生じてきたから。

C 人々の生死にかかわる感染症の脅威が再び高まるなかで、場合によっては個人の意思に反して医療措置を実施する必要が生じてきたから。

D 死亡率が高い感染症が流行の兆しを見せ始めたことで、人々に精神的不安やパニックが引き起こされ、社会の混乱が問題になってきたから。

E 感染症を発症した患者の人権を守るために、医師は治療方針に関して患者本人の選択や決定権を優先しなければならなくなってきたから。

〔問三〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 公衆衛生促進のために人々は節制や運動などを互いに勧めあうようになったのだ

B 個人の選択の自由のほうが公衆衛生活動の意義よりも尊重されるようになったのだ

C 公衆衛生活動において早期発見・早期治療が以前より重視されるようになったのだ

D 公衆衛生の対象になる事例とそうではない事例との境界があいまいになったのだ

E 公衆衛生活動は個人のライフスタイルにこれまで以上に干渉することになったのだ

〔問四〕 空欄(6)にもっとも適当な漢字二字を入れ、慣用表現を完成させなさい。

〔問五〕 傍線(7)「リバタリアン・パターナリズムは一見してミルの自由主義の立場に近いが、ミルにはあまり見られなかった興味深い視点がある」とあるが、その内容の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A ミルは、公衆衛生活動における政府の個人行動への介入は最小限にとどめるべきだと考えたが、リバタリアン・パターナリズムでは、人間が最大の利益を得るためには一定の強制が不可欠だと考えられている。

B ミルは、人間は合理的なので政府が介入しないほうが公衆衛生活動は円滑に進むと考えたが、リバタリアン・パターナリズムでは、人間は不合理な存在なので行動を統制しないと社会問題は解決しないと考えられている。

C ミルは、人間は自己責任において健康を害する行動も自由に選択できると考えたが、リバタリアン・パターナリズムでは、他人に危害を加えない限り公衆衛生に反する行動も選択することができると考えられている。

D ミルは、人間は自発的に協力しあうことで公衆衛生活動を維持できると考えたが、リバタリアン・パターナリズムでは、人間は自発的にはなかなか行動しないため、政府の働きかけが必要だと考えられている。

E ミルは、公衆衛生活動のために人々に特定の行動を強制することは認められないと考えたが、リバタリアン・パターナリズムでは、将来の利益に反する行動をとることを回避させる働きかけが必要だと考えられている。

〔問六〕 空欄(10)(11)に入れる組み合わせとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A (10) 理性 (11) 情動

B (10) 自意識 (11) 無意識

C (10) 経験 (11) 直観

D (10) 悟性 (11) 虚栄心

E (10) 良識 (11) 本能

〔問七〕 傍線(12)「リバタリアン・パターナリズムでは、人々がより健康的な選択肢を意識的に選ぼうとしなくてもそうできるように環境の方を変更しようとする」とあるが、喫煙に関してリバタリアン・パターナリズムの手法をとる場合、適当でないものを左の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 街なかに設置するたばこの自動販売機の数を減らす。

B 喫煙できる場所をすぐには行きづらい所に設置する。

C ライター、灰皿などを目につきにくいところに置く。

D 公共交通機関や飲食店を分煙にして禁煙席を設ける。

E パッケージに入っているたばこの本数を少なくする。

〔問八〕 次の文ア～ウのうち、本文の趣旨に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア ミルが活躍した十九世紀には人々の公衆衛生意識も高かったが、現在は商業主義の発展とともに様々な誘惑が存在するため、ミルが主張した他者危害原則ではすべての問題には対応しきれない。

イ 人間は現在の快苦を過大評価し、将来の快苦を過小評価する傾向があるため、この特徴をうまく利用した広告や販売方法を用いることで、人々に合理的な行為を選択させることになる。

ウ 人間は個人の好き嫌いに基づいて選択を行なう傾向にあり、常に最善の利益を考えて行動するわけではないので、ハートによれば公共政策の展開に当たっては強制的な手段をとることも必要である。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

肖像は私たちの身近にあふれている。多くの人がいろいろな場所（例えば学校や会社）で見てきたものであり、肖像写真も写真館のウインドウや家の仏間に飾られた先祖の写真など、至る所にある。運転免許証やパスポートなどの証明写真もその一種とすれば、誰でも持っているものといえよう。また、肖像という言葉もごく一般的で、「家族の肖像」とか「平成の肖像」というような隠喩的な使い方も多い。例えば「昭和の肖像」であれば、時代としての昭和のそれらしき姿、昭和の多様な姿を総じて表している。

「肖」の意味は、「にる」「あやかる」であり、もともとからだを小柄にするという意味から、「からだつきがにる」に意を転じたようである。さらに手元の古語辞典を引いてみると大変面白いことが書いてある。「肖り（あやか）」といえば不安定に揺れ動くこと、動揺して変化することを意味するという。この意味でもし肖像という言葉を使うなら、似ている像というよりも、不安定に揺れ動く像ということになる。こういう使い方は普通しないとしても、このような含意がありうると考えると興味深い。そのほかに「肖り」の使い方としては、影響を受けて変化する、影響を受けてそれに似る、人まねをするというものがある。また名詞形としては愚かな者という意味もあって、これが像となれば愚か者の像ということになるが、さすがにこんな使い方は聞いたことがない。そういえば「不肖～は」という言い方がよく使われるが、父に（もしくは師に）似ず劣ること、愚か者という意味で

(1)［　　］する場合に使用されている。

「あやかる」という言葉にもう少しこだわってみたい。一般に、影響を受けて同じ状態になる状況や、他人の幸運や成功を味方につける場合に使われる。これに像をつけると肖る像ということになり、これはぴんとこないようでもあるが、(2)肖像という言葉の本質の一端を表しているように筆者には思われる。肖像の対象となるのは偉人や目上の人物である場合が圧倒的に多い。時に崇（あが）める宗教的対象であり、敬うべき祖先であり、景仰（けいこう）する人物の肖像を尊いと思うと同時に、徳望や叡智（えいち）にあやかりたいという気持ちがこもっているように思われるのである。

『日本美術史事典』の東洋の肖像の記述によると、肖像は「肖」＝似すがたであって、像主の外観はもとより、全人格を内在させたものでなければならなかった。中国の肖像画は勧戒画（悪を戒めるための絵画）もしくは聖賢像として成立したが、そこでは像主との相似性（肖似性）が当然要求されるだけでなく、内面的な全人格、境涯の表出も不可欠であった。このような外見上の写実と内面への迫真を「伝神写貌」と称し、肖像の価値判断の基本概念を成立させたという。中国、六朝東晋時代の画家、顧愷之は「伝神とは精神を伝えることであり、写貌はそのための手段である」とし、「眼は心の窓」として真なるものを表現するためには「点睛」（瞳を描き入れること）を肖像画制作第一の課題としていた――。

しかし疑問に思うのは、内面の表現とはどういうことなのかということである。「肖像」が絵姿であり、二次元的な姿を見るためのものであるとするならば、写実を行うだけで（その外見から）内面も読み取れるはずではないのか。すなわち、外見上の写実に内面性を加えるということは、そのままの「見た目」に、何らかの内面性と見なされうる要素を無理に付加することにならないのか、という疑念がわきあがる。おそらく写真以前の東洋の肖像は、最低限の写実的容貌を保ちながら、例えば威厳であるとか、誠実さ、知性などが読み取れるような表情のコードに従ってコラージュして、その人物に期待される「全人格」を表す必要があったということであろう。

容貌を手がかりに人物像をとらえる、表情を読み取るということは日常的に為される。だが、一方向からとらえられた固定されたイメージは、その人物の一瞬の姿を顕現させる表面的なものでしかなく、見た目からは探りえない不可知な部分があることは認めねばなるまい。逆説的に言えば、だからこそ肖像を読み取るという行為（あるいは表情を読み取るという行為全般）は、像そのものを超えた過剰な意味を背負って存在するものなのだろう。[3] 人は表情から読めるはずもない感情を勝手に誤読し、それのみではわかりえないはずの人物の性格を肖像から類推する。もちろんこういったことが無意味であると述べているわけではない。過剰に意味を見出しがちだということを指摘しているだけである。

ここで想起されるのが似顔絵である。「似顔絵」という文字に注目すれば、肖像と同様の意味になるように思われる。しかし実際には、この二つはニュアンスを異にしている。似顔絵はより身近で手軽なイメージがある。さらに重要なのは、似顔絵が人

物の個性や欠点を強調することで特徴を際立たせるような効果を持っていることであろう。一筆書きのような線描でもその人物らしく見えるのは、当人と他の人物を分かつ特徴を誰にでもわかるように誇張することに起因する。

実は肖像も程度の差はあれ、似顔絵と同様の要素を持っている。全般に似顔絵よりも質感や写真的リアリティを持つがゆえに、誇張にあまり気付かれないということであろう。

肖像は、本来多様である（様々な表情を持つ、年齢により異なっていくなどなど）人間の像をある典型で代表させる。人物の特徴をとらえ、中心的でない要素を捨象する。さらには内面的特徴（例えば優しいとか、厳格であるとか）を示す表情を外見に加えていく。こうして考えると、(4)。

しかし、そのような限界を超えて、もしくは限界を承知しながらも、私たちはその人物を代表するに相応しい容貌と人格の表現を湛（たた）えた絵姿、望むらくは理想的な絵姿に身代わりを演じさせ、肖像は後世にまで視覚的イメージとして伝わることとなるのである。源頼朝をはじめ、教科書などで紹介され続けた像主でさえ、研究が進むにつれ、疑念が呈される例がある。肖像に描かれた人物の伝来が確かであっても、これまで記してきたように、もともと肖像が全人格をとらえる種のものではないことは明白である。

ただし、多くの場合、肖像がその人物をそれなりに忠実に表していると見なされていることも確かである。いちいち真の姿かどうか分析するなど面倒な話であるし、西郷隆盛銅像のように、本人をモデルにできずに作られたにもかかわらず、また本来どんな風貌だったかわからないにもかかわらず、それ以外の顔を思い出すのは困難なほど普及したものもある。このように考えていくと、肖像は似せるという要素があると同時に、その人物に対して期待すべき人格なり徳望なりを表象するという側面があることがわかるであろう。ある意味では理想的な像として肖像は存在する。

（平瀬礼太『〈肖像〉文化考』による）

注　景仰……人格の高い人をあおぎ慕うこと。　コード……約束事。　コラージュ……異なる種々の素材を寄せ集め、新

しい表現世界を創る絵画の技法。

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 誇張　B 軽蔑　C 自嘲　D 謙遜　E 冷笑

〔問二〕 傍線(2)「肖像という言葉の本質の一端」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 景仰する人物の像に触れることで尊敬の念を増す意味があること
B 宗教的対象や祖先に対する敬虔な感情を呼び覚ます効果があること
C 他人の世俗的な成功にあずかりたいという心理が見受けられること
D 自己の殻を破って変貌したいという願望が込められていること
E 徳や智のある人物に感化されたいという欲望が表われていること

〔問三〕 傍線(3)「像そのものを超えた過剰な意味を背負って存在する」とあるが、なぜそう言えるのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 肖像画は人物の一瞬の表情や内面を、見る者が自由に類推して捉えるので、様々な誤読が生じてしまうから。
B 様々な意味が一枚の肖像画には込められているので、見る側には意味の混乱が生じることになってしまうから。
C 人物の外面を描いている肖像画から、先入観や期待によって感情や性格などの内面を読み取ってしまうから。
D 肖像画の本質は人物に似せる面と理想像に近づけるという二つの面があるため、意味が一つに確定しないから。
E 肖像画にはそれを見る者の期待や意味づけが、長い年月にわたって積み重ねられてきたという歴史があるから。

〔問四〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 肖像という言葉が時代の姿を隠喩的に表すことがあるように、肖像画は一つの明確な人格的表現には適さない

B 負の面も含めた全人格を提示することなどできうるはずもなく、肖像が総合的人格を表すとは言いがたい

C 外見上の写実から出発してさらに内面性を加える肖像画の技法は、必要以上に装飾的な要素が含まれてしまう

D 写真以前の東洋の肖像は、時代の期待する人格的な要素を表すことが求められたので全人格的表現ではない

E 人物の似顔絵に比べて質感やリアリティの面で優れている肖像画では、誇張的な要素は切り捨てざるを得ない

〔問五〕 本文の筆者の考えとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 誇張的要素の強い似顔絵と内面性重視の肖像画に違いが生じるのは、それを見る者の感受性や期待感の違いによるところが大きい。

B 中国の勧戒画や聖賢像には像主との相似性が求められたので、全人格や境涯などの内面的要素が導入された場合には画像の写実性は損なわれた。

C 肖像は西郷隆盛像のようにたとえ本人の実像が不明なまま制作されたものでも、そこに時代が期待する理想的な姿が表れているものである。

D 肖像画と似顔絵では写実性の点で大きな違いはないが、肖像画には似顔絵にない崇高な内面的要素が付加されるという特徴がある。

E 顧愷之の「伝神写貌」とは中国の六朝時代の肖像画制作上の理想的な基本概念だったが、その頃の画家は「見た目」に内面を与えることができなかった。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

生きていることは歓びなのだと思う。生きていることの中に歓びや苦しみがあるということではなくて、まずは生きていることそれ自体が歓びなのだ。

こう書くとすぐに反論が予想される。「生きている」という状態は、たんに生体の中での化学的な反応や電気的な反応が恒常的に継起している状態にすぎない。おまえが軽率にも書いた「歓び」という状態も、脳の中の特定の部位が反応している状態にすぎなくて、人間はそれを「歓び」と言っているけれど、将来の進化したコンピュータやいつか出会うかもしれない宇宙人に言わせたら、それはあくまでも客観的に「××が反応している」ということだけであって、「歓び」というような〝判断〟は人間のローカリズムの証明にしかならないだろう――というようなものだ。

人間はまず肉体のレベルで存在していて、そこに言語が上書きされることで「人間」となる。別の言い方をすると、人間とは肉体のレベルでだけ存在しているのではなくて、そこに言語が上書きされなければ「人間」とはならない。しかしまた別の言い方をすると、言語だけがあっても肉体がなければ人間は存在することができない。

偶然見つけた新聞の記事にこんなことが書いてあった（読売新聞二〇〇〇年七月九日朝刊）。石橋幸緒という十九歳の女流棋士は先天性の腸閉塞で生後九ヶ月で手術したが、医者からは元気に育つのは難しいと言われた。

「栄養補給はすべて点滴で、口から取るのは薬だけ。苦い粉薬さえ〝食べられる〟のがうれしくて、すぐに飲み込むのがもったいなくて、水も飲まずに、『おいしい』と口の中でもぐもぐ味わっていたのを覚えています」

ここで、「おいしい」という言葉は、「まずい」と対になる〝判断〟を意味していない。「味がある」という事実、さらには「食べる」という行為それ自体を指し示している。人間は――ここでは「動物は」とも言い換えられると思うが――「おいしいから食べる」のではなくて、「食べることがおいしいから食べる」のだ。口に物が入り、その大きさ硬さ柔らかさ甘さ苦さ……etc.を感じ、それを舌や歯や顎の連携で噛み砕いたり捏ねるようにしたりしたあとに飲み下していく……という、一連の行

為それ自体が「おいしい」ということで、原初的には味に対する〝判断〟は介在しない。「生きていることは歓びなのだ」と言うときの「歓び」とは、(2)この「おいしい」と同じ次元で起こっていることだ。

しかし、言葉の用法として、この「歓び」や「おいしい」は間違っている。なぜなら、〈人間＝肉体＋言語〉という構図を想定した場合、いま私が主張している「歓び」や「おいしい」は、肉体において起こっている事態なので、それに言語をあてはめることはできないのだから。――これは本当だろうか。

〈人間＝肉体＋言語〉という式のようなものを書くと、人間という現象が肉体と言語という二つの要素に分解可能なような錯覚を与えかねないけれど、本当は、人間とは肉体と言語がガチッとセットになっているというか (3) のようなものになっていて、二つに分けて考えることはできない。人間において、肉体とは言語と不可分で、言語もまた肉体と不可分だ。つまり、〈肉体＝肉体＋言語〉という式と〈言語＝肉体＋言語〉という式をうちに含み込んだ上で、ようやく、〈人間＝肉体＋言語〉という式を想定することが可能になる。

構造主義は言語をたんに〝差異の体系〟と考えた。その場合、「歓び」とは「苦しみ」と対になった「歓び／苦しみ」の片側であり、「おいしい」とは「まずい」と対になった「おいしい／まずい」の片側の状態ということになってしまう。また、構造主義は言語を〝完成されたもの〟と考えた。つまり言語とははじめから〝差異の体系〟として人間に与えられたものであって、言語の発生の瞬間など考えようとしてみても意味がないし、そんなものはロマンティックなフィクションでしかない、というものだ。

しかし言語は根底のところで強固に人間の肉体と結びついている。存在することそれ自体と結びついている、と言い換えてもいい。肉体という基盤がなかったら、言語は発生しなかったし、人間のものにもならなかった。言語の発生を事実として確認することは不可能に近いだろうけれど、それを理由に「フィクション」や「空想」と言って切り捨てることは、むしろ思考の放棄だと私は思う。言語は発生において肉体を必要とした。存在していることのリアリティがなかったら、言語は生まれなかった。言語には存在することのリアリティが裏地として息づいている。石橋幸緒女流棋士の「おいしい」はまさにそういうものとして、

言語の発生と結びついている。

言語をただ〝差異の体系〟と考えるのではなくて、言語から、その裏に息づいている肉体や存在することのリアリティを発見し直すことが必要なのだ。構造主義が言うように、人間は(4)「人間」への進化の入り口に立ったときにすでに、完全に〝動物性〟から断ち切られて、自然との連絡をいっさいなくしていたのかもしれない。そういう考え方もできないわけではないが、この考え方の方がむしろ科学性を欠いた迷信か独断だと思う。

人間だって特殊な状態に置かれると、「おいしい」が「おいしい／まずい」という〝差異の体系〟の内側での〝対〟ではなくて、言葉に先行する存在することのリアリティを取り戻す。また、ことさら特殊な状態に置かれていなくても、人間は進化の系の末端に位置する種として、鳥や虫たちが花や木の実を発見するメカニズムと同質のメカニズムを人間的に変形させて、花や木の実を見て「美しい」と思う。人間は自然と完全に断ち切られているわけではなくて、動物と同じ自然への感受性（＝神経細胞の発火）を濃厚にとどめている。人間が木の実を好んで食べる理由を、(5)「サルが食べているのを見て学習したから」と考えるより、「サルだったときから食べつづけていたから」と考える方が、ずっと自然だし論理的だ。

あるいはまた、恋愛の真っ只中にいるとき、その相手は〝差異の体系〟の外にいる。好きな相手は他の誰かとの比較やそれ以前に恋した相手との比較を超える。いま好きなその人が〈私〉の心の動きのすべてを見ていて、(6)〈私〉の判断は〈私〉の心に住むその人に委ねられる。つまり、〝絶対化〟する（というか、絶対化した相手だけが〝恋人〟になる）。思春期に恋愛の破綻が引き金となって統合失調症を発症するケースが、稀にとはいえ確実にあるのは、恋人が〈私〉の精神の活動の根源を支えるような錯覚をもたらすからだ（これほど深刻ではないにしても、誰でも失恋したときには、「世界が終わる」ように感じるものだし、しばらくは世界が輝きを失って見えるものだ）。

（保坂和志『世界を肯定する哲学』による）

〔問一〕 傍線(1)「人間のローカリズム」の意味としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人間が広い世界の中では特別な存在であるということ
B 人間が普遍的な見方が出来ない存在であるということ
C 人間が一部を見て全体を判断する存在であるということ
D 人間が多様な生物の中の一つの存在にすぎないということ
E 人間が主観と客観の区別が出来ない存在であるということ

〔問二〕 傍線(2)「この「おいしい」と同じ次元」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「おいしい」「まずい」以前の肉体に根ざした感覚の次元
B 「おいしい」「まずい」を感じ分けられる肉体的な次元
C 「味がある」ことに気づいて「おいしい」と驚く瞬間の次元
D 「おいしい」と思いつつ食べることに歓びを感じる人間的な次元
E 「おいしい」「まずい」より食べられるものを食べる動物的な次元

〔問三〕 空欄(3)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 相互に介入し合う重層構造
B 相互に干渉し合う一体構造
C 相互に成長し合う並列構造
D 相互に浸透し合う入れ子構造
E 相互に反応し合う化学的構造

〔問四〕 傍線(4)「「人間」への進化の入り口に立ったとき」とあるが、これと同じ意味で使われている十字以内の語句を本文中から探し出して答えなさい。（句読点、かっこ等も一字と数える）

〔問五〕 傍線(5)「「サルが食べているのを見て学習したから」と考える」とあるが、筆者の言う構造主義がこのように考えるのはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で応えなさい。

A　人間はサルから進化したという前提に立つので、食べる際にも学習という人間ならではの行為が必要と考えるから。

B　人間はサルと断絶しているという前提に立つので、人間は学習を通じて初めて食べられるようになると考えるから。

C　人間はサルと対の関係という前提に立つので、人間がサルと同じものを食べるのは、学習した結果だと考えるから。

D　人間とサルは差異の体系の中にあるという前提に立つので、人間とサルの違いを学習という行為の有無と考えるから。

E　人間とサルは同質のメカニズムを持つという前提に立つので、人間はサルから食べることを学習できると考えるから。

〔問六〕 傍線(6)「〈私〉の判断は〈私〉の心に住むその人に委ねられる」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 恋愛は世界が一変する体験なので、〈私〉というものがなくなって、〈私〉の判断は〈私〉と一体化した相手の判断と同じになる。

B 恋愛は差異の体系の外に連れ出される体験なので、〈私〉の判断は、相手の判断と対になるのではなく、相手の判断そのものとなる。

C 恋愛は〈私〉の精神の活動を支える相手を手に入れることなので、〈私〉は相手の判断を受け入れて、相手の思うままに動くことになる。

D 恋愛は〈私〉が相手を絶対だと思うことなので、相手の判断は他の人の判断と比べて、〈私〉にとって最上の判断となる。

E 恋愛は比較を絶して相手を好きになることなので、〈私〉自身で判断しているつもりでも、相手の判断に従っていることになる。